



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第二十四主日 A 年（2026 年 9 月 13 日）

主任司祭 小西 広志

第一朗読：シラ書 27 章 30 節－28 章 7 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 14 章 7－9 節

福音朗読：マタイによる福音書 18 章 21－35 節

三つの朗読から

第一朗読では「憤りと怒り」が復讐という罪の動機となります。しかし、自分と同じ「人間に憐れみをかけ」れば（4 節）、自分の罪の赦しを願うのは可能となります。弱い者同士である人間が「憤りと怒り」を持ち続けたら、誰もその人の罪を赦すことはできないのです（5 節参照）。ですから、「隣人に対して怒りを抱くな」（7 節）と強く勧めています。

第二朗読には「生きる」ということばが何度も登場します。神に生きるようにと招かれているキリスト者は、同じく父なる神に生きた主イエス・キリストの生き方が模範となります。「わたしたちは主のもの」（8 節）という表現はわたしたちのいのちがキリストに属していることを教えてくれます。

福音朗読は無制限の赦しについてのたとえです。赦しを受けた人は、隣人への赦しを行うはずですが、しかし、このたとえに登場する家来には寛容がありません。「憐れに思って」（27 節）、「憐れんでやる」（33 節）が印象的な表現となります。深い同情を表すこのことばのおかげで赦しが成立し、関係が回復していきます。赦しとは関係の回復に他ならないのです。

先週の福音朗読では「兄弟」となる、「兄弟」を得るがテーマでした。今日の福音朗読ではその兄弟が罪を犯した場合の「赦し」がテーマとなります。

ペトロとイエスさまのやり取りを見てみましょう。21 節に「何回赦すべきでしょうか」とペトロは問いかけます。ユダヤ教のラビたちは兄弟を赦す回数を三回までと教えているそうです。ペトロは「七回までですか」とイエスさまに問いかけますから、ずいぶん優しい、寛容なものとなっています。しかし、ペトロの関心は赦す回数にあります。つまり、ペトロは赦しを我慢と捉えていたのではないのでしょうか。相手から何か損害を受けても三回までなら我慢で

きる、あるいは七回までなら我慢できるという発想です。しかし、人間の我慢には限度がありますから、そのような赦しは本当の赦しにはなっていないでしょう。

イエスさまの答えに「七の七十倍」（22節）とあります。

『創世記』4章24節に次のようにあります。「カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍」（フランシスコ会訳）。復讐には制限がありませんでした。イエスさまはこの古い聖書のことばに基づいて、今度は赦しには制限があってはならないとします。『創世記』のこの箇所が、後にギリシア語に訳される時に（七十人訳）「七の七十倍」となりました。

イエスさまの話すとえを見てください。24節に「一万タラント」とあります。一タラントはおよそ六千デナリオン。一デナリオンは一日の賃金と考えればよいでしょう。つまり、一万タラントは六千万日分の賃金となります。想像を超えた負債です。25節にあるように借金が払えない場合は負債者の身柄、持ち物はもとより、妻や子までも売り払っていたようです。この人の対応が興味深いです。26節：に「ひれ伏し、……しきりに願った」（フランシスコ会訳は「哀願した」）とあります。「ひれ伏す」はプロスクネオー。ある人や対象物の前にひざまずき、その足もとや衣のすそや大地にキスをする時に用いられたことばです。東方の博士たちが幼子イエスさまのもとに来た時にも使われています（2章2節参照）主君は「憐れに思って」（27節）、借金を帳消しにします。これは「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた」（14章14節）でも使われた言葉です。「心から同情した」という意味です。

たとえの結末で、30節に「しかし、承知せず」とあります。王が家来の負債を帳消しにしたのは、我慢したからではありません。「主君は憐れに思って、彼を赦し」たのです（27節）。王の深い憐れみが赦しを引き出します。王は自分の金を取り戻す（しかも高額な金を！！）よりも、この家来との関わりを大切に思っていることがうかがえます。ここから赦しの本質が見えてくるでしょう。つまり、赦しとは断ち切れそうになった人間関係を、回復することです。本当の損害とは金銭や物質的な被害ではなく、兄弟の交わりが損なわれることなのです。しかし、せっかく赦してもらった家来は、まったく逆のことを自分の仲間にしてしまいます。

33節の「お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」が生き生きとした表現となります。家来が大切にしようとしたのは、王や仲間との交わり、関係ではなく、自分が貸し付けたお金でした。神の前で仲間として生きているなら、深く憐れんで赦してくれる神に出会った人は、兄弟を互いに心から赦す者になるはずなのです。